

柔構造の先賢

周布政之助 (二八三三―一六四)

(5)

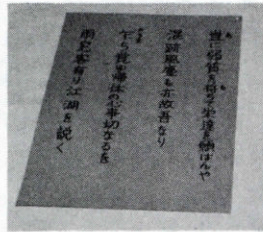
室將弱質慕紫途混跡風塵
 亦故吾乍覺歸休心事切雨窗
 有客說江湖
 麻田支隱琴

先大津代官中捕鯨の振興と孝女登波の顕彰に著明な事蹟をあげて萩に帰り、要職につくことになった(安政四年九月一八五七年)

一八五七年五月知友僧月性(和真道師の師匠)逝去し、井伊直弼將軍家大老となり、七月オランダ、ロシアと更に英国及び米國ハリスと条約を結び世情はそう然となつてきた、藩ではこれに対して兵制を改革して内政を刷新することになり、政之助は「藩政改革の綱要」をつくつた。

当時吉田松陰は政之助の慰諭を聞かず「時勢に対する激しい言動」のために野山獄に入らせられていた。

安政六年六月(一八五九)藩主が江戸から帰国して恒例によつて藩吏の交代を行った。
 元來国元にあつて政務をとるのを国相府といひ、藩主に従つて江戸に行つて政務をとるのを行相府といひ、そうして天保嘉永以來、いわば進歩的な政策をとる―村田清風周布政之助(吉田松陰)と保



守派―坪井九郎右衛門棟梨藤太の交互に政務を担当する習慣―力関係による―の様になつていた。

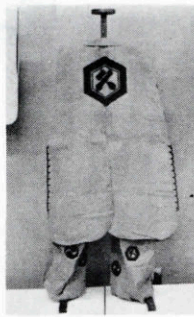
この度の交迭(代)に當つて政之助は再び政務役となり、兩相府の吏員は保守派が引退し進歩派が大量に進出した。

藩政改革の要綱

- 1 運政 一四條
- 2 文武引立 十條
- 3 政道条令並びに家來中の成立 二十六條
- 4 民政 十二條からなり、軍政

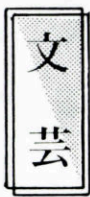
については、神器陣兵法(清風松陰の時代の在來のもの)を一時中止して、練兵(訓練演習)を五つ

に分け
 (1)歩兵訓練小隊訓練鼓法大隊訓練
 (2)大砲のうち方 砲隊の訓練
 (3)歩兵銃の立つたり坐つたり寝たりしたうち方、十八陣習練、小隊諸役三式
 (4)馬に乗つた騎兵の銃のうち方姿勢、騎銃隊の訓練
 (5)大隊以上の指揮法 砲隊や歩兵騎兵連合の指揮法等であり、一方海軍の拡張を図つた。



この様に軍政に力を注ぎ洋式訓練を大たんに入取れ、軍艦の購入や製作に努めたので、他の雄藩に比較して、目をみはるような刷新が行われ、幕府に対抗出来る力を次第に養つて行き、従つて藩の発言力は強くなつた。

齊藤元宣



清風句会

三光

「天」

九重

各年代のものを虫干して見ると昔の紋は今の紋より太いことに気付いた。良い所に着眼したものだ。

「地」
 刈り伏せる草に混りて女郎花
 信子

バサバサと刈り伏せた草の中に可憐な女郎花を見つけた女心ならではの情趣あり。
 「八」
 秋近き風が生み出す波頭
 史

秋近くなると、夏とは違つた波頭がよせて来る。波頭によつて季節の移りを感じるのは、やはり俳人ならではの感情である。
 「五客」
 まだ若き遍路姿や道元忌
 元

虫干の袂に昆布の紙包み
 ひで
 未だ袖通さぬ晴着虫干す
 句一
 朝な夕な肌を感じる秋隣
 千代
 亡妻の地味な晴着も干してあり
 梅雪

佳作

露草の徑刈上げ客迎う
 虫干や母のかたみの地味すぎて
 九重
 ぶぶぬれて稲穂を守る案山子かな
 鬼子
 セーターも長袖となり秋近し
 さつき
 娘を送り夫も黙して虫時雨
 ひで

野地蔵や赤きトンプのリボン付け
 病床や稲刈る夢の日々続く
 梅雪
 ぶぶぬれにぬれたる雨の案山子かな

虫干や亡母が好みし帯あせぬ
 よし子

公開を兼ねて曝書の文書館
 寺小屋の教本もある曝書かな
 旬一
 晩学の辞書の手垢や著者の窓
 介護の灯喪の灯となりぬ居待月
 元

秋近し嫁の話も決まりしと
 ゆか
 永病みし日記なつかし書を曝す
 波止裏に漁船たむろし益の波
 史
 黄蜀葵ひと日の命華やかに
 虫干しや筵の本を盗み読む
 千代

はさみ持つ子をさし上げてぶどう狩り
 床下の虫に我家の夜は更けて
 信子
 選者 吉村隅川先生

争ごとの早期解決に

(民事調停の利用を)

調停は、宅地・建物・金銭・農事・交通事故・公害などのめごとについて、裁判所で話合い、ゆづり合つて実情に即した妥当な解決をはかる制度で、少しも堅苦しさを感じられない民主的な仕組みになつています。

この制度の特長は、解決が早く決められたことは訴訟の判決と同じ効力をもつていますから確實です。申立の手続は簡単で費用も少額です。

申立についてくわしいことは、長門簡易裁判所へ、秘密は守り無料で皆さんの相談に応じていますから気軽にご利用ください。